

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 和田 浩平

論 文 題 目

高機能広汎性発達障害児をもつ父母の心理的体験と
社会的援助の在り方

論文審査担当者

主 査

名古屋大学心の発達支援研究実践センター准教授 金子一史

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 森田美弥子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 窪田由紀

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、高機能広汎性発達障害（High-Functioning Pervasive Developmental Disorder: HFPDD）児をもつ父母の心理的体験を詳細に捉え、その変遷の過程を明らかにすることであった。また、HFPDD 児をもつ父母の精神的健康と、ソーシャルサポートおよび夫婦間コミュニケーションとの関連を明らかにした。そして、HFPDD 児をもつ父母に生じ得る問題と家族支援および社会的援助のあり方について考察した。本論文では、HFPDD 児を持つ父母の心理的体験過程を質的な手法を用いて詳細かつ丁寧に描き出している。さらに、父母の精神的健康とソーシャルサポートおよび夫婦間コミュニケーションについては、量的な手法を用いて実証的に検討している。それらを通して得られた知見について、父母間での異同を整理し、HFPDD 児をもつ家族に生じ得る問題と社会的援助のあり方について、検討を加えている。

第一章では、先行研究をレビューし、その問題点を論じた。HFPDD 児をもつ親は周囲の無理解による孤独感を経験することが多いことから、HFPDD 児をもつ親がどのような体験をしているのかについて詳細に記述し理解することが必要であると指摘した。HFPDD 児をもつ親の心理的体験過程は、障害受容過程と障害認識過程を中心に検討されてきたけれども、それらの相互関係や、その他の心理的側面を総合して検討した研究はみられないことを述べた。また、親の精神的負担を軽減するうえで、どのような社会的資源からのこういった援助が必要かを明らかにすることが重要であると指摘した。なお、HFPDD 児の親に関する研究では、母親を対象にした知見がほとんどであり、父親に関するものが極めて少なく、その異同について検討することは家族全体を視野に入れた支援を行う上で重要であることを述べている。

第二章では、HFPDD 児をもつ母親の心理的体験過程を明らかにした。HFPDD 児の母親 12 名に対して半構造化面接を実施した結果、(1)自身の育児への自責感を抱いていた母親にとって、障害児であることの認識は安堵感を得られる体験となる一方、障害への抵抗感から悲嘆・不安にも苛まれること、(2)悲嘆・不安と期待・安心といった両面の感情は、特性が問題となるイベントや子どもの成長・落ち着きといった現実の出来事、さらには家族を取り巻く周囲の対応の在り方に伴って循環的に移り変わること、(3)HFPDD の知識的な理解と特性の経験的な理解が結び付くことで、わが子が障害児であることの認識を得て、育児への手ごたえや子どもの気持ちに寄り添う姿勢をもてるようになること、(4)障害への抵抗感、他の子どもや、その親・支援者との出会い、さらには周囲からの特性への肯定的な意味づけによって、障害を個性とする態度へと移行することが示された。

第三章では、研究 1 と同様に、HFPDD 児をもつ父親の心理的体験過程を明らかにした。HFPDD 児の父親 14 名に対して半構造化面接を実施し分析を行った。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

その結果、母親で認められた心理的体験の特徴が、(1)を除いて父親にも認められることを明らかにした。一方、父親の特徴としては、周囲からの指摘・告知と同時にわが子が障害児であることを実感する父親と、腑に落ちない感じを経験する父親とに分かれ、認識に伴う感情もそれぞれ異なっていることを明らかにした。

第四章では、HFPDD 児をもつ父母の精神的健康の指標として抑うつに着目し、ソーシャルサポートおよび夫婦間コミュニケーションとの関連について検討した。質問紙調査によって得られた 43 組の父母の回答を分析したところ、(1)抑うつ状態と判定される者は、母親では 67.4%、父親では 48.8%であり、父親も母親同様精神的負担が大きいこと、(2)父母の抑うつは、インフォーマルな資源からのサポートと相関がみられること、(3)母親は家庭内・外の援助資源からのサポートを経験しているが、父親は家庭内の援助資源からのサポートに偏ること、(4)母親の抑うつは父親からの実際的サポートとの相関が強いのに対し、父親の抑うつは母親からの心理的サポートとの相関が強いこと、(5)抑うつと夫婦間コミュニケーションとの相関は父母ともに有意であったが、父親の方が強い相関があることを明らかにした。

第五章では、得られた知見を概観し、父母の心理的体験の差異について以下の点を指摘した。(1)母親は発達初期に子どもの特性に違和感や問題意識を覚え、自身の育児の責任として自責的になるものの、父親は特性には気づきながらも楽観的であること、(2)母親は子どもの特性への違和感から、障害への抵抗感は抱きながらも、障害の有無を明確化することに積極的になるが、父親の障害認識過程は特性への楽観的な態度や障害への抵抗感から受動的なものになりがちなこと、(3)母親は、障害児であることの認識から悲嘆・不安とともに安堵感を経験するものの、父親の中には悲嘆・不安のみを経験する者がいること、(4)障害児であることの実感へと至る時期には父母間で差異があり、父親の中には障害児であることを認識しながらも腑に落ちない感じを抱く者もいること。こうした違いは、父母が互いの心理的体験を共有することを困難にし、その結果として夫婦関係の悪化へと繋がり、父母の精神的健康や子どもの成長や支援にも影響する危険性があることを指摘した。今後の社会へ向けての提言として、家族や地域、学校をはじめとする子どもの生活場面における HFPDD および HFPDD 児をもつ家族への理解を築き上げることの重要性について述べた。続いて、医療・療育機関や学校といったフォーマルな援助資源のサービスの在り方について、改めて見直すことの必要性について言及した。そして最後に、夫婦間コミュニケーションによる支援の可能性について論じた。

本論文の内容に対して、審査委員からは以下のような指摘がなされた。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

(1) 対象者の属性に関する記述が不十分ではないか。対象者は親の会に参加している人となっていたけれども、どのような偏りがあると考えられるか。対象が異なった場合、どのような結果が得られると考えているか。

(2) 夫婦間コミュニケーションでは、質問紙調査法に加えて観察法などを用いて検討する必要があるのではないか。

(3) 心理的体験過程や夫婦間コミュニケーションでの父母間の隔たりについては、少なくした方が良く考えているのか。そうであるなら、どの程度まで隔たりを解消できると望ましいと考えているのか。

(4) 学校からの心理的サポートは、母親の精神的健康とは関連が認められないのに対して、父親の精神的健康とは大きく関連していたことについて、より取り上げるべきではなかったか。

このような指摘に対して、申請者は概ね適切な応答を行った。また、本論文の限界、今後の課題等についても十分に把握していた。本論文は、HFPDD 児をもつ親の心理的体験過程を総合的に検討したこと、これまでほとんど取り上げられることのなかった父親について詳細に取り上げたこと、夫婦間コミュニケーションに注目して検討した点で、障害児の家族臨床の分野に大きく貢献する論文であると判断された。

以上のような結果より、審査委員は全員一致して、本論文を「博士（心理学）」の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。